歸綏識略と清水河廳志

森　鹿　三

水野編輯子から蒙疆の方志と游記について書くやう依頼もされ、自分でも書く心算でゐたのですが、遂に果すことができず慚愧に堪へません。游記の方はともかく方志は朱士嘉の中國地方志綜錄（史學年報の第十周年紀念特刊にはその補編が載つてゐます）のやうな便利なものがありますので、それをたよりに調べれば宜しからうと簡單に考へてゐたのです。一體今謂ふ所の蒙疆とは前の察哈爾・綏遠兩省に山西省北部（前清時代の大同・朔平兩府の疆域）を加へた地域を斥すのですから、朱氏の目錄もその區域のものを目當にすればよい譯です。この邊は北京圖書館所藏のもの、殊に北京圖書館だけに藏せられてゐるものが多いので、北京圖書館へ駈け付けたのですが忽ち齟齬を來しました。といふのは、北京圖書館だけに藏せられてゐるやうなものは天下の稀本である譯ですから、事變前逸早く南方へ運び去られ、北京には殘つてゐなかつたのです。泡のやうなことを考へてゐた自分が情なくなつてカードを無暗と檢索したことでした。その中で歸綏識略を檢出しえたことだけはせめてもの慰めです。

この書は、昨年私が北京へ來て以來購入しようと探し求めてゐたものなのです。實は昨夏東亞文化協議會にやつて來られた羽田先生に從つて傅增湘氏を訪れた際、傅氏の編修されてゐる綏遠通志の稿本を見せて貰ひました。それにはこの歸綏識略を盛に引用してゐますので、羽田先生からも一部購ひ置くやう命ぜられました。しかし未だに入手することが出來ません。民國二十三年春、顧廷龍が顧頡剛と綏遠に旅行した時、通志館に立寄りその架上に歸綏道志のあるのを見、その引用書中に稀覯のものが多いのでそれを寫し取つて禹貢半月刊二卷七期に綏遠方志麒爪と題して掲載してゐ

ます。その中にも歸綏識略が擧げてあります。北京圖書館のは近年青寫眞に撮つたもので、青寫眞であるが故に却つて北京に殘されたのです。綏遠通志の編纂には北京圖書館の謝國楨なども從事してゐることですから、或は通志館にこの書があつてそれを青寫眞に撮つたのではないかと思ひます。北京圖書館でも青寫眞に撮る程ですから、まあ珍本でせう。咸豐十一年に出來上つてゐます。著者は張曾(字は小袁)山西崞縣の人です。天・地・人・物の四部に分つてゐて一寸變つた方志です。天部は星野・節氣の二卷、地部は沿革・疆域・山川・古蹟・陵墓・城郭・壇廟・寺塔・公署・官學・義學・教場・金庫・田賦・市集・賽社・濟邮・村莊・卞倫の十九卷、人部は駐蹕・巡幸・官制・兵防・宦蹟・賢林・使臣・寓客・史鑑・詩詞・土默特呼圖克圖の十一卷、物部は土產・稅課の二卷、それに補遺・正誤の二卷を隨時增入し、都合三十六卷より成つてゐます。天部の記事は科學的で地氣の北に移ることを實證してゐます。物部の記事も面白いと思ひます。寺塔淸眞寺の條に、回教徒は元來すべて肉類(諸肉)は食ふことを禁じてゐたのだが、黠い者がゐてこの「諸」を「猪」の字に改め猪肉だけを禁するやうになり、以前よりは禁を寬やかにしたといふ如きは些か噴飯物ですが大體興味深い方志です。高賡恩の綏遠旗志や張鼎彝の綏乘もこの書を大いに參考してゐます。張心泰の官海浮沈錄も盛にこの書を引用してゐます。詳細は他日に讓り歸綏識略のことは此位にして置きます。先程申しました傅氏編修の綏遠通志百二十卷も印刷の運びになつてゐるとのことです。

その後淸水河廳志(北京圖書館所藏のを寫したものと思はれます)を文殿閣松村太郎氏の好意で見せて貰ひました。自分の好みかも知れませんが、他の處はとにかく風俗の部は面白いと思ひました。御參考までにその中の節序の處を抄出します。

正月元旦。五鼓夙興。闔屬商民。燒柏葉。放花爆。雜陳牲醴餚饌。焚香。拜祀天地神祇。謂之接神。次拜祖先畢。乃長幼序拜。黎明親族隣友。各互相往來拜賀。謂之拜年。

初五日。俗呼是日爲破五。商民於黎明時。掃室中穢土。以筐盛之。送置十字路旁。名爲送窮。

十五日。上元佳節。入夜衢衢中。懸燈籠火。有扮作文

故事。沿街歌唱者。名秧歌。有扮作武故事。沿街舞打者。曰社火。又有以竹編船。用色紙糊飾一人。粧扮美女在船中。沿街游行。名爲船燈。花爆盈耳。士女如雲。頗覺熱鬧。

二十日名小添倉。二十五日名老添倉。農民於晚間。用荍麪或油麪黃米麪。揑作燈盞。沿口揑小尖拐。按月計數。蒸熟時。卽麪盞中水之多寡。以卜某月雨之多寡。往往而驗。是日以爐中之炭灰。畫圈於院中。名爲打窖。小添倉窖圈內埋麥豆。老添倉窖圈內埋黍穀。早晚俱焚香於內。至晚卽點麪燈於內。名曰看窖。

*

二月初二日。相傳以爲龍擡頭日。居民於黎明時。用木桶。向井汲新水。中放銅錢數枚。挑歸室。傾入缸甕內。名曰引錢龍。是日多薙頭髮。名薙龍頭。

清明前一日爲寒食。是日俗名鬼節。居民家家拜祭墳塋。凡新婦其姑必領之以祭墳。男女孩童。以木繫繩。架作鞦韆爲戲。又以麥麪揑作鳥形。名寒燕兒。以供兒女之嬉玩。

*

四月初八日。居民入聖母廟。祈禱施油香。而婦女尤盛。有將廟中泥孩。用紅繩拴繫者。有點誌於身上者。又有將泥孩抱歸者。名爲拴寄兒女。

十八日。古城坡本書卷五古蹟云在街中北山麓每歲於是日。賽會演戲。士女如雲。頗稱繁盛。

*

五月初五日。端陽節。商民男女婦。均以艾簪髮。以紅棗黍米糯米爲粽。飲雄黃酒。小兒以五色絲線。繫項臂。名曰鎖兒。又以五色綵帛。作爲囊。如鷄心形。內裝雄黃佩於身。以避蟲毒。農家於是日。祭虬蜡。俗名祭虾蚢。

二十五日。大廟在東閣外雷鼓子坡。內祀龍神。祈雨靈應。每歲於是日。酬神獻戲。商民霧集。士女雲屯。稱極盛焉。

*

六月十三日。小廟村在西閣外五里許有聖泉寺。內祀水神。每歲於是日賽會。刑牲演戲。用答神庥。擧國士女商民。無不咸往游觀。且其地淸幽。有暖泉一股。澄碧甘洌。內有長生萍。其葉蒼翠。四時不凋。他處所無。尤稱佳勝。是日游人雜還。借以揚靑。携酒殽。席地而坐嬉戲。至夕而還。

七月十五日。是爲中元。亦名鬼節。拜掃祖塋。一如清明。是日也。居民用麥麪。蒸作美人形。餽送戚里。以供兒女之嬉玩。比戶皆然。

*

八月十五日。中秋節。商民以月餅瓜菓等物相餽送。入夜則陳設瓜果月餅於院內。焚香叩拜。以供月光。然後劇飲歡賞。竟夕乃罷。

*

十月初一日。亦號鬼節。民間呼爲歲臘。拜祭墳墓。皆如淸明中元。並剪紙爲衣。焚於墳上。或於夜間。焚之門外。謂之送寒衣。

冬至日。居民於是日。亦拜祭墳墓。如鬼節。但賀冬之禮。久廢不行矣。而士商家。有於是日以紙爲圖。畫圈其中。而墨染之。仿古作消寒圖者。

*

十二月初一日。農人以麻豆油麥炒熟。五更後擧家咸食之。名曰咬鬼。又名咬草。其習俗然也。

初八日。居民合扁豆雜米糧。和棗煮粥。名臘八粥。農家五更時卽食。俗傳誰家早食。來年禾苗早熟。農人打置冰片。栽立糞堆中。名臘八人。俗傳爲糞中不生蟲。又是日僧人在關帝廟中。邀衆諷經。名雪山會。並設施粥飯。以濟窮困焉。

二十三日。晚間設果餅餳糖於竈前。焚香奠酒。以祭竈。名爲送竈神上天。此後數日。諸神朝天。百無禁忌矣。

歲除日。是日晦日。名除夕。易門神。換桃符。貼春聯。爆竹盈耳。家家卑幼人等。羅拜於尊長之前。以次拜揖。名爲辭歲。老幼團飲歡讌。亦有通宵不寐者。名曰守年。又名熬年。

以上は卷十六風俗中の節序の處を抄出したのですが卷五古蹟の腦包の條下に「附近蒙古於每年六月六日。宰犧牲。具香楮。相牽前來獻賽。名曰祭腦包。」といふ記事がありますから、附け加へておきます。